

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2008	4939	乙 2199

早稲田大学博士学位請求論文概要書

魯迅の政治思想

——西洋政治哲学の東漸と中国知識人——

高 晃 公

魯迅の政治思想

——西洋政治哲学の東漸と中国知識人

—

魯迅の生涯にわたる思想を、主として西洋政治哲学の中国への東漸との関係で論じた。西洋政治哲学の受容に際して、魯迅は独特の思想的対応を行った。中国知識人に大きな思想的転換をもたらしたのは、進化論（社会的ダーウイニズム）とプラグマティズム、そしてマルクス主義であった。中国知識人はこれらの西洋政治哲学を、中国の政治的変革の必要性と結びつけて理解した。資本主義世界経済が要求する近代政治システムと、それにふさわしい社会構成体を中国知識人は模索していた。かれらにとって、西洋政治哲学の東漸は、中国が置かれている支配体制を対象化する契機を与えるものであった。中国の国家と政治を対象化せんとするとき、外来の政治哲学は彼ら中国知識人の判断の基準にならざるをえなかったのである。それほどに伝統的な儒教の知的影響力は強力であり、支配原理として大きな力を持っていた。中国の政治文化や社会構成体は、圧倒的な影響力を持つ儒教の文化的支配下に置かれ、西洋政治哲学は知識人の知的運動の触媒となったが、現実の政治文化や社会構成体は依然として儒教を知と文化の支配原理としていたにすぎなかった。

知識人は西洋政治哲学と中国の政治文化ならびに社会構成体との関係を、あるいは全面的西洋化の文脈で捉えようとし、あるいは両者の妥協と融合の試みによって調和させようとした。魯迅は文学者であったが、自身の政治思想を具体化するために文学を用いた、独特な意味における文学者であった。その文学は彼の思想的遍歴の跡を如実に示しているが、それにとどまらず、つねに現実政治に対する主体的な関係と緊張を持った作品を生産し続けた。『中国小説史略』の底流に流れる反儒教的な歴史意識、雑文に集約された政治思想、翻訳にあらわされた外国思想への関心と個性的な接近、中国への版画の導入による芸術の大衆化といった魯迅の業績において、それらのどれを取っても、政治的志向性を持たぬ業績はなかったのである。何よりも注目すべきは、『中国小説史略』に代表される魯迅の歴史観、思想史観である。この作品によって魯迅は、中国民衆の儒教に対抗する思想史、文化史を、儒教が徹底的に無視し軽視してきた分野である「小説」の歴史の中に発見することになった。中国における「小説」とは、中国民衆の思想的代弁者の立場をとったものであるという魯迅の小説史観は、必然的に魯迅自身を民衆の代弁者としての立場に追いやることとなった。魯迅の政治思想とは、中国の支配者と知識人が、民衆から引き離して独占しようとした文化的思想的営為を、民衆の立場から民衆の代弁者として、魯迅自身が再構成しようとした努力の中に認められるものである。したがって、魯迅の政治思想は、文化全体を対象とし、その表現は民衆の思想の代弁者にふさわしく、民衆に近づきやすい文学的スタイルとなった。しかし民衆の思想を表現するはずの文学ですら、知識人と政治的支配

者が民衆から引き離そうとした中国の文化においては、魯迅の文学的活動は、必然的に政治的なものとなり、その思想は激しい闘争に貫かれた論戦の表現形式をもってあらわされざるをえないものとなった。すなわち魯迅自身が「雑文」と呼んだ、新しい文学スタイルの確立である。雑文という文学的形式によって表現された政治思想は、民衆に対して権力者と知識人の持つ本質的相貌をあきらかにするために、自然発生的に生み出されたものである。この文学的スタイルをもって表現された魯迅の思想こそ、政治思想家魯迅の存在を告知するとともに、魯迅の内的世界ならびに世界観を最も直截的な形で開示するものであった。

二、

魯迅はその思想遍歴の出発点となった日本留学中に、西洋の歴史と思想を研究し、いくつかの論文を書いた。西洋の立憲民主政治と常備軍の充実、富国、殖産興業といった現象にとらわれている他の留学生を批判して、魯迅は「国民精神の発揚」を掲げた。かれは意思の力を高く評価したばかりでなく、思想の能動的役割を主張している。西洋の物質文明と強力な軍備は枝葉に過ぎず、根幹は精神の涵養にあるとする魯迅の思想には、日本近代化に対する直感的と言ってよい批判があった。これらの論文には、すでに嚴復や章太炎の進化論の思想的影響が見て取れる。魯迅は嚴復の『天演論』を読み、西洋の進化論を批判的に検討して、徹底的な変動論者の視点をもって、独特の進化論を展開するようになる。魯迅にあっては、進化は対立する二項の併進運動、二項の両極への併進の運動として理解されている。歴史における発展を、新しいものと古いものとの対立と同時に、新旧のものとの同一性と相互転化のうちに捉えようとする。魯迅の独特な進化論理解は、西洋の歴史や政治哲学の理解に反映しており、西洋の歴史を対立的極へと向かう変動運動と考え、歴史はつねに偏至することで反対へと転換してゆくという論理を提起した。その歴史観の根底には章太炎の「俱分進化」論の強い影響力が見て取れる。章太炎の「俱分進化」は、ヘーゲルの論理学と歴史哲学、ならびに仏教思想が混合した独特の進化論理解であった。若き魯迅はそれを西洋の歴史を全体的に対象化する際に用いた。西洋の文明では、科学は物質に偏至しており、民主主義は多数に偏至している。したがって、西洋文明の持つ一面性を克服し、全面性を持った視点で西洋文明を批判的に理解するためには、なによりも精神と個性を尊重しなければならないとしたのであった。このような独特の批判的な理解は、西洋理解にとどまらず、その後、対象を論理的に認識し表現する際に、つねに魯迅の文章の底流に流れる執拗低音となった。同時にかれは、西洋の強大さの根源を科学ならびに科学思想に見て、それこそが、西洋の実業、実利の根本であるとした。他の中国知識人が西洋の実業、実利に眼を奪われ、その根底にある科学と科学思想、ならびにそれを担う主体の精神的強靱さに眼を向けないことを魯迅は厳しく批判している。魯迅は西洋の合理主義と科学の根底にあるのは精神的強靱さであるとして、あくまでも国民精神の作興を自己の西洋理解の中心にすえている。精神の主体的能動的な作用の重視は、魯迅をして科学と愛国

の結合といった性急な結論へと導いてゆくのであるが、それはともすれば魯迅の思想を、ニーチェや「悪魔派詩人」に代表されるロマン主義的な色彩を帯びた思想に傾倒させることとなった。

しかし、この個人主義的観念論と評される当時の魯迅の思想にもかかわらず、中国知識人としては稀有な西洋文明に対するトータルな批判的視点を持ちえた歴史観を提示しているところに、他の中国知識人と異なる魯迅の思想家としての特質を見て取ることができる。法則と規範、物理と道理を一体化して考えるという、中国の伝統思想の影響が色濃く残る魯迅の政治思想は、物質と多数、科学と民主に偏至した西洋文明に対する批判という形で特異な鋭さを示す。そこに見られる強烈な精神的主体性の強調とヘーゲルに似た全体的な歴史観は魯迅独特のものであり、後のかれの政治思想に通底する思想方法となった。西洋文明の政治と文化が偏至を繰り返し、反対の極へ転化していったという論理的歴史観と、科学と科学思想を担う主体精神の作興の主張は、魯迅のその後の思想的展開を貫くものとなった。しかしその歴史観は、あまりにも観念的で主観的ロマン主義的な色合いに染まっていた。いまだ周到な人間、社会、国家の理解に裏打ちされていない若き魯迅の思想は、現実の政治的力関係の前に挫折を余儀なくされる。日本から帰国した魯迅を待っていたのは、沈黙を自らに課さなければならない政治的現実であった。

三

西洋文明の特質を精神の強靱さに見て取った魯迅が、帰国後直面したのは、悲哀と寂寞の生活であった。孫中山の革命は挫折した。中国人の「愚弱な精神」を「強靱な精神」に転ずる方策を見出せないまま、魯迅は「二重思想」と規定した知識人の政治思想に直面する。伝統的な意識形態である孔子教を利用して、専制政治の残滓を維持しようとする権力を容認するとともに、西洋近代政治の立憲共和政を制度的に導入しようとする康有為らの改良主義は、魯迅にとっては、思想における政治的二重性を露呈するものにほかならなかった。しかし若き魯迅の「物質を排して、精神を重んじ、個人を尊重して、多数を排撃する」思想では、あまりに抽象的であって、西洋政治哲学を利用して、中国の現状との調和をはかる「二重思想」に対抗するにはいまだ無力であった。具体的な中国の人間と現実生活に即した、民衆の琴線に触れる思想の構築が俟たれていたのである。

この魯迅の思想に画期をもたらすのが、『中国小説史略』であった。ここにおいて魯迅の歴史意識がたんなる抽象的な進化論や歴史観から、中国小説史という具体的な対象をもつようになったからである。反儒教の立場から中国文学史を鳥瞰せんとするその姿勢は、民衆の歴史意識を反映した芸術としての小説の「発見」に魯迅を導いたのであった。中国小説に着目した研究は、すでに日本における塩谷温の先行的研究が存在した。しかし、小説を儒教に対する批判的な歴史意識に基づいて、思想的、論理的、系統的に展開したのは魯迅が嚆矢となった。小説を通して間接的に表現されたと考えられる民衆の歴史意識は、それまでの魯迅の進化と退化の弁証法的歴史観に顕著であった抽象性を払拭することとなっ

た。魯迅の批判に具体的な内容を与え、中国社会独自の政治的文化的土壌に根付いた、個性的な魯迅の政治思想の相貌をはじめて見せたのが、『中国小説史略』で具体的に展開された魯迅の歴史意識であった。

四、

進化論の次に西洋政治哲学の東漸を告げる思潮は、歴史論理的には、プラグマティズムであった。ジョン・デューイの中国講演を契機として、中国にもたらされたプラグマティズムは、胡適を代表とする中国実用主義として中国思想の一潮流となった。胡適を媒介とすることで、プラグマティズムは中国的な色合いを持つことになった。すべての外来事物を卑俗な形で中国の色合いに染め上げずにはおかない中国文化の特質は、胡適の思想にも典型的にあらわれていた。その点を魯迅は冷笑的といってよい姿勢をもって批判する。しかし中国実用主義は、その後も中国政治における思想的な影響力を持ち続けるのである。魯迅の思想と胡適の実用主義との違いはその歴史意識、とりわけ儒教をめぐる歴史意識によく表れている。魯迅は儒教に対する徹底的な歴史的批判を、小説を民衆の意識表出のあらわれとみなすことによって可能とした。これに対して、胡適は儒教の歴史的考証とキリスト教との比較解釈によって、孔子の歴史的意義を明らかにしようとする。胡適の儒教に関する歴史観は、民衆の思想との連関性を排して、あくまで知識人論の枠内にとどまる。民衆の思想は胡適にあっては、墨家とともに滅亡したとされており、魯迅が民衆の思想の担い手であるとともに表現手段と考えた「平民の文学」としての小説の発見とは、対照的な思想的立場をとっている。

J.デューイの中国訪問とともに本格的に中国に流入した実用主義の思想は、胡適と李大釗の「問題と主義」論争でマルクス主義とプラグマティズムの衝突の様相を帯びる。しかし、李大釗のマルクス主義自体が、マルクスの思想とりわけ弁証法的唯物論理解に独特の解釈と大胆な展開を示したものであり、またかれの論敵である胡適のプラグマティズム理解にも魯迅の言う中国的な着色がなされていた。したがって、論争自体はさいたる成果をあげることなく、すれちがいに終わってしまったのはやむをえないことであった。魯迅にとっては、中国知識人の外来思想に対する理解の仕方は、根本的には、中国知識人の生き方と主体性の有様にかかわる問題であった。魯迅の思想からすれば、実用主義とマルクス主義というその後の中国思想界に運命的な地位を占める思想も、それを担う人間の现实生活と切り離しては存在し得ないものであった。実用主義にせよマルクス主義にせよ、中国的な理解を経ると、西洋政治哲学に見られた深い知的衝動と哲学的苦闘の跡は捨象され、卑俗な解釈がほどこされてしまう。その典型が胡適であり、創造社や太陽社に集ったマルクス主義知識人たちであった。そのような中国知識人の典型を拒否し、実際の政治的格闘と実践的な運動によって、深い思想的衝動をもって思索した中国知識人を魯迅は求めた。その典型のひとりが李大釗であったが、中国の現実政治はつねにこのような知識人に対して過酷な裁可を下す。魯迅はそのような中国の否定的現実によりそい、その暗黒を直視す

ることで、自らの思想の彫琢を続けた。魯迅の思想の深刻さはこのような政治的葛藤から生まれたといつてよい。

五、

魯迅が実用主義者胡適の思想的卑俗さを批判したのと軌を一にして、上海で勢力を伸ばしていた創造社、太陽社などのいわゆる革命文学者との論戦が展開された。この論戦の重要性は、魯迅が中国マルクス主義知識人の活動と思想を対象化してみる機会を得ることになったとともに、かれらの思想であるマルクス主義そのものへと、自らも接近する可能性を魯迅自身に与えたことにある。

魯迅が直視せざるをえなかった中国の現実、阿Qに典型化されたような農民の否定的思想というべきものによって表現される。魯迅はそこに「寂寞」を感じ、そこからかれの吶喊の声がわき起こる。それは毛沢東が井崗山の戦いで感じていた「寂寞」と限りなく近いものであった。「寂寞」と称するしかない孤立の中で、魯迅のマルクス主義に対する接近の仕方における、根元的で独自の姿勢が生まれたのである。

マルクス主義の東漸は、その後の中国の歴史にとって重大な意義を持つ。しかし背景には、中国におけるマルクス主義が、実践的にはロシア革命によってもたらされるとともに、理論的には精緻な形を誇った、日本マルクス主義プロレタリア文学の文献資料から輸入されたことは忘れてはならない。日本のプロレタリア文学の誕生と、それに対する小林秀雄による批判は、概略的な形で脚注において触れられている。中国の革命文学が日本のプロレタリア文学の理論的輸入であったことは、中国マルクス主義の理解に際して、日本文学理論におけるマルクス主義思潮の歴史的展開過程を知る必要を生じた。その展開過程を基礎にして、魯迅と小林秀雄の歴史的役割についての理解と評価を行うことは大きな意味を持っている。同時に、脚注に追いやったが、小林秀雄と対照的な地位にあった、小林多喜二の死に際して、魯迅と多喜二との胡風を媒介とした思想的交錯に触れた。それは、はからずも中国文学と日本文学の歴史的性格を描き出すエピソードとなると思われたからである。

魯迅と創造社同人との論戦、とりわけ郭沫若、成仿吾との論戦は、マルクス主義をめぐる中国知識人の活動と思想のひとつの批判的典型となるものであった。かれらとの論戦が「泥仕合」と言われながらも、やがて「左翼作家連盟」へと大同団結して行く機縁となったのは否めない歴史的事実である。そこに中国と日本との政治と知識人をめぐる違いを見て取ることができるとともに、その後の両国のマルクス主義が迎える歴史的命運の岐路があったと考えられる。魯迅のマルクス主義者理解において、創造社同人と対照的な評価が与えられているのが李大釗であった。魯迅が中国マルクス主義に求めたものは、思想を担う主体の行動様式と、そこから生まれる思想が、一体となって作り出す言葉と世界観の現実生活との関係性 (relevance) であった。それが中国の解放に役立つのであれば、魯迅は歓迎するのであり、中国解放運動に害をなすのであれば、徹底的に批判した。その意味で、マルクス主義を

意匠として理解するという発想は、魯迅にとってはそもそも無意味であり無縁のものであった。

瞿秋白がその魯迅評価で指摘したように、魯迅が論戦の相手や共感できる知識人の姿として描いたのは、中国マルクス主義者について魯迅自身が理解した典型像にほかならない。それゆえに、そこにこめられた魯迅の批判と寓意は、今日の中国を理解する上でも重要な意義を持っている。この論戦から抽出された魯迅の思想的方法が「拿来主義」である。「拿来主義」は魯迅独特の思想方法であるとともに、その背後にある魯迅の世界観、主体性をよくあらわすものと考えられる。「拿来主義」に似た方法は、マルクスの哲学、社会主義、経済学批判においても、基底を貫いて見て取れることは、注目されてよい。ヘーゲルやブルードン、スミスやリカードの思想をマルクスが「拿来」したように、魯迅は中国知識人が、わがものとした政治的立場とその思想的あらわれを、批判的に検討し自己の政治思想の前提ならびに素材とした。それゆえに魯迅が批判の相手である創造社同人やその他のマルクス主義者たちと「左翼作家連盟」を結成し、中国共産党の大衆組織の代表的存在として、文学者の枠を越えて、あえて自己の政治的立場を公然化したことは、魯迅の政治思想の総決算となるべき切実な選択であったと言いうる。

六、

魯迅の政治思想の展開の最後に「一九三〇年代左翼作家連盟における魯迅」が位置する。魯迅の晩年における生命の燃焼と、政治思想の論理的発展の帰結とが、ひとつになって最後にたどりついたのが、「左翼作家連盟」での魯迅の活動と、厳しい政治情勢に対応した中国知識人たちの思想に対する批判であった。時局の緊張と歩調を合わせて、自由主義者、民族主義者、第三種人、そしてトロツキズムとスターリニズムといった現代思想が中国知識人を席卷したとき、魯迅はそれらのひとつひとつを吟味して論戦を挑んで行った。そこには躍動する政治思想家魯迅の姿があり、魯迅の最後の政治的・思想的遺言がある。またそこには魯迅の雑文芸術の方法的に完成された姿があり、論戦のひとつひとつが、あとで全体としてみれば、当代の中国政治思想の歴史的・性格の全体像を構成しているようになっているのである。「左翼作家連盟」における魯迅は、政治的実践の中にあることによって、このような思想的全体性を表現する雑文芸術を、完成させる機会を得たと考えられる。

毛沢東と王明の共産党内部における闘争を反映して、共産党の大衆組織である「左翼作家連盟」内部でも、魯迅と周揚の確執が生じていた。この組織内の確執をつうじて、魯迅は中国共産党ならびに中国マルクス主義の持つ思想的問題、知識人と大衆との懸隔の大きさと官僚主義の問題に取り組みざるをえなくなっていた。魯迅が最後の力を「左翼作家連盟」の活動に注ぐことによって、中国知識人の思想と政治組織の関係というさらに具体的な主題に切り込み、その筆刀を振るわなければならなくなったのは偶然ではない。現代の思想と組織に対する批判は、これらの現代思想をもって自己を代表させている中国知識人の人間模様と人間存在にたいする根元的な具体的批判へと魯迅を誘ったのである。「左翼作家連盟」における魯迅の論戦を追う際の方法には、マルクスの『神聖家族』ならびに『ド

『イツ・イデオロギー』で用いられた歴史的思想的批判の方法とオーバーラップさせる方法を用いた。それ以外に、この多岐にわたる多様な思想のあらわれを、簡明に整序する方法がなかったからである。しかし意外にも、魯迅が批判した思想の系列を追っていると、中国における現代思想の見取り図が浮かび上がる結果となった。魯迅による中国現代思想批判を通じて出現したのは、中国のイデオロギーあるいは、中国知識人の知の位階制に対する魯迅の一貫した批判であった。

七、

最後に、魯迅の思想を総括的に論じているが、そこでは、魯迅の思想の検討を通じて、中国知識人論が展開される。「儒教の文化支配の完成は、大衆の無教養の完成であった」という認識に基づいて、魯迅の中国知識人批判は成立しえたのであり、そこに今に至る中国文化の特質を見いだすことができる。文化の変革が政治運動の日程にのぼらなければ、中国政治思想を今も呪縛する中国官僚制の知の位階性と事大主義的權威は、最終的に克服され得ない。

中国知識人の精神にたいする外的、形式的規制の呪縛に対する根元的批判こそは、魯迅を文学者でありながら政治思想家としたものであった。行政組織にからめとられた知識人が生み出す文体は、政治的支配の手段として活用されるや、民衆の災厄となる。魯迅が戦闘した敵は、このような文体をもって権力者に奉仕し民衆の上にあろうとした、中国伝来の思考と行動様式を持った知識人であった。西洋政治哲学の東漸は、外的、形式的規制の下での知の位階制にあっては、中国知識人にとっても中国の民衆にとっても、その現実生活に深刻な影響を与えるものではなかった。ただ中国化された中国文化の色合いに染め上げられた西洋政治哲学が、巷間に流布したにすぎなかった。魯迅は西洋政治哲学のなかから選りすぐったものを、他の知識人に対する批判を媒介として自己の中に取り込み、平易に翻案して大衆の眼にさらすことにより、大衆の思想の新しい地平を、中国思想界に实际的な形で入れようとした。それは魯迅のマルクス主義に対する姿勢全体を貫いていたのであり、結果として、マルクス主義における国家論とりわけ官僚制と常備軍をめぐる考察、ならびに知識人と大衆をめぐる文化の諸問題へと、新たな政治思想の地平を切り開くことになった。その先には毛沢東の政治思想が横たわっているのである。